大地

13号
S59. 1. 10
真宗大谷派
浄国寺(23)5724

## 『願生』出版のこと
### ―想い出の父―

山崎　睦

昭和十三年五月。縁あってこゝへ嫁いでから、健康な父（隆英）との生活は一年半に満たない。

しかし、さっぱりとして物にこだわらずとても温かい父であった。結納の時に、朝酒と晩酌だけは嫌な顔をしないようにとの約束だった。父の歌には酒の歌が多い。朝早くから、庭いっぱいに並べられた植木の手入れをしてから、おもむろに縁先にお膳が持ち出され、酒がはじまる。よき時代であったといえよう。父の植木は、実生、取木、自分で育てられたものが殆んどであった。たまに植木友達が来られ「この枝を落としたら」とすすめても「折角ここまで延びたのだから」と切り落とそうとしない処など、本当に父らしい温かさが感じられる。

又、常に子供を可愛がられた父は、兄（俊英）が亡くなった時の悲しみを次の様な歌に託している。

吾子逝きて
日に日に淋しうつし世に
あらんかぎりはつきぬ寂しさ

憶ふまじ
憶ふまじとは思へども
想い出されて涙こぼるる

金子大栄先生を師とし義兄として尊敬され、先生の著書を片時も離されず、外出の時は懐に入れて胸をふくらませて出掛けられる。一面、正義感が強く、曲って居るとなれば、どんな処へも立向って行かれる。先年亡くなられた暁鳥敏先生が高田へお出でになられると、よく訪ねて下さり、「よう、越後の名物男しっかりしなさい」と病気の父を励まして下さった。

師にも友にも恵まれた父は、師も友もとても大切にされた人である。故石田善佐とは交友も深く、氏の国会出馬の時はそれはもう一生懸命だった。

病気で床についたことのない父も六十一才で脳卒中で倒れてからは、歌に読書にの毎日であったが、発作の度を重ねる毎に少しづつ弱っていかれたようである。『願生』も、本堂の窓先へ机を持ち出して母を傍に、少しづつ整理をして行かれたがなかなか思う様に筆が運ばず、二年程を費したように記憶している。漸く原稿が出来た頃は戦中戦後と、心にかけつつも遂に発行には至らず、今日まで延々になってしまって、実に申し訳のないことと思うばかりである。

この度、前住職の三回忌を契機に、父の三男であり前住職の弟である山崎正信氏の大きなお力添えに依って漸く出版の運びとなったこと、とても有難く、また肩の荷をおろしたような思いである。

折にふれ、広く有縁の方々に読んで戴ければ幸いに思います。

◎前々住職釈隆英の自選歌集を昨夏出版し縁有る方々にお届けすることが出きました。有難いことと思います。

表題の『願生』も隆英自身の手によるものです。「一切有情の生きる願い」そして「弥陀の誓願に生かされる私」ということなのでしょうか。

（隆昌記）

## 大根の葉

長谷川　敬　喜

今年の九月中旬、高陽荘で倉敷病院長、遠藤博士の講演を聞く機会に恵まれた。

演題は「青汁健康法」主旨は青汁を飲んでいれば、大体の病気はよくなるとのこと。

(1)　青汁とは何か

緑のナッパ、それも質のよいもの。つまり総てのビタミンに富み、吸収され易いかたちのミネラルに豊んだ緑のナッパからのしぼり汁のこと。ケール、大根、人参などホウレン草は駄目。倉敷病院ではケールの葉からしぼった青汁を、入院患者に飲ませている。ケールは、キャベツの原種で、最も適しているらしい。

(2)　なぜきくのか

ナッパに含まれている葉緑素、ミネラル、ビタミン類、植物繊維それに青汁がアルカリ食品であることと、葉緑素を多量にとることが良いのであろう。人間の血液の赤血球と葉緑素の構造が、すごく良く似ているとの事。

ともかく青汁を飲んでいると、血液が奇麗になり、病気が治っていくらしい。青汁の量は病気によっても違うが、二、三合は必要。菜の目方で五百グラム以上、食べても良いわけだが、量が多すぎるので。

(3)　私ども夫婦の実践

大根の葉に蜂蜜と水、または牛乳を加えてミキサーで三分ぐらい回転させて青汁をつくり、朝夕二回飲んで、もう二ケ月がたつ。飲みはじめて一週間ぐらいで効果が出てきた。私の痔の出血、家内の右耳からの耳漏が止まったのである。家内の耳は二十年来、苦しんできたものである。今後又悪く成るのかわからぬが兎角、今、止まっているのである。嬉しくて仕方がない。大根の葉のお蔭と感謝している。人参の葉も良いとの事。人が捨ててしまうものに、こんな力があろうとは。

来年はケールを育てようと、稲田の仲良し保育園から苗をもらってきて、今、大切に育てている。私の心臓病、糖尿病もこれで治ってくれないかと楽しみにしている。

長谷川氏は御夫婦で教職の身にあられる。静かで真面目な方。一昨年秋頃より身体を悪くされ長く入院療養されていた。現在療養中、早く元気な長谷川さんになられることを願う。

## 日記から

山崎　武　雄

四十九年十月二十七日

曇り時々雨

今日はぐっすり眠り、夜明け方に便所に行く。タンの出も少し。朝食后、体をふいて貰う。午前に注射あり。山本千秋氏、世話人会の前に親切に立ち寄られ、いろいろ慰めてくださる。

直子、国雄と葉子を連れてひげすり器を持って来てくれる。何といっても人が来てくれる事は嬉しい。慎子には報恩講の案内の中、寺院関係、三国や、饒村さん、谷内さんなどの名宛を書き渡す。徳子への自作の絵葉書も頼む。室内にばかりいて運動不足の為か、食物が胸につかえて居る感じにて食欲がなく一寸淋し。

夕方、家より電話あり。本日の世話人会は集まりもよく、内山氏司会の下に隆昌、正信等の説明にて全て住職、家族の意向通り、一同の同情のもと決定したと通知あり、安心す。七時、睦、隆昌親子揃って来り、詳細に本日の世話人会の説明してくれ、ただ有難く、涙さへ出た。着替えをして貰い、七時四十分帰る。

## Y老人のこと

山崎隆昌

特別養護老人ホームに勤め十年随分多くの老人に会えた。

Y老人は威厳ある学者の様な人であった。ホームでの生活は読書三昧、朝の光が窓辺より差し込む頃から夜の消灯まで片時も本を手元から離したことがなかった。

下半身が全く不随意で、ベット上に起座し、静かに読書する白髪の横顔は美しく、濃紺の着物姿と調和してもよい雰囲気だった。

Y氏は右足を壊疽（えそ）にやられ、日に日に腐れが進んでいた。

とうとう右足大腿部より切断のため中央病院に入院された。

しばらくして見舞に行くと相変ず読書に親しんでおられた。

別れ際、Y氏から「読む本がなくなったので、新しい本を三冊ほど買ってきてほしい。お金を渡すから」と頼まれた。僕は「じゃあ適当に選んで買ってくる。お金はその時貰う」と応えた。即座にY老人曰く「お金は後でいいという者に限って約束がいつになるかわからん。お金を渡しておけば必ず買ってくるから」。思わず苦笑。

自分の弱いところをグサリとやられた感じである。

春がすぎ、暑さに寝苦しい夜の続く夏の日の夜中、電話が鳴った。ホームの宿直者からである。

Y老人が病院で亡くなられたとの知らせ、急いで病院にかけつける。Y氏の身体はまだ温かかった。僕の他は誰もいない。

間もなく福祉事務所のT氏も来られ、二人で病院のY氏の持物を整理した。沢山の本があった。ほんの数回しか使われなかった義足が痛々しかった。

そしてY氏の他に誰もいない霊柩車がホームへ向けて走り出した。僕は車で後を追いながらとりとめなくY氏とのあれこれを思い出していた。空には無数の星が光っていた。

～o～o～o～o～o～o～o～o～o～o～

## ミーコ（猫）

小学二年　山崎真尚

十二月三十日

きょうもまたこばやしくんとあそぼうとしたけど、だめといわれてひまでした。さんぽしてかえりました。うちのミーコがしにそうでしんぱいです。なんせミーコはふつうのねこが九さいでしんでしまうところを十八になって、人間でいえば百五十さいですからしんぱいです。ろうすいでちをはきました。かわいそうです。

十二月三十一日

きょうもミーコがしんぱいでした。二かいもちをはいたのでかわいそうでした。つるをあげました。きょうで十九さいつまり百五十一さいです。もうろうすいはなおらないのでしんでしまいます。すごくかわいそうでした。でもしかたありません。だからがまんします。

一月一日

きょうはおしょうがつでもミーコが十九さい、つまり百五十一さいで、じょやのかねをききながらしにおわりました。目をあけたままかわいいかおでしずかにねむりについたのです。とうとうミーコもおじいちゃんのなかまいりです。

うちのうめの木の西の一メートルさきに、ガーゼでまいてうめました。

## 旅の想い出

山崎慎子

この春、私は幸運にも一人旅の機会に恵まれた。生れて初めての純粋の一人旅である。結婚して子供が生れてからも、身軽に一人で出掛けることは割合多かったと思うのだが、それはいつも、ある目的を果すための旅行に限られていた。そういう意味で、旅自体が目的の一人旅という、何かしらロマンチックな響きをもつ体験が殊の外嬉しかったのである。

あるいは自立神経失調症とも、あるいは不定愁訴とも人は言うのだろうが、実はこの春の私の状態は丁度そんな塩梅だったのである。

旅行はそんな私を気遣った義母の優しく、又有難い贈り物だったのだ。母が、浮かない顔で溜息ばかりついている私に、旅行でもして気をはらしていらっしゃいと言ってくれた時、母に申し訳ないと思いつつ、私は旅への誘惑をはねのけることができなかった。少なからぬ俊巡の後、ごく短い時間に私は旅の手配をし、行き先を、東京と木曾に決めた。

私は東京の街を殆んど知らない。ふと、人波にもまれたい衝動にかられた私は、上野から新宿に出てしばらく雑踏の中にまぎれこんでいた。いつもは煩わしいばかりの東京の街の人混みが、今は妙に心地よかった。全く見知らぬ人の波、誰一人私のことなど気にもとめない人々の群れが、不思議に精神を休ませてくれた。人間という言葉と文字の持つ意味はぼんやり考えてみたりもした。

翌日訪ねた木曾は実際「木曾路は全て山の中：：」であった。藤村の世界を垣間見たような気がしたのは単なる旅の感傷だったろうか。旧中山道を上り下りし、古い家並みを蘭川のせせらぎを耳にしながら訪ね歩いて、一人旅の孤独と気楽さを存分に満喫しながら、己の生き方の甘さを改めて思い知らされていた。昔の旅籠の名残りそのままの宿で一夜を明かし、山桜の満開の桃色が、木曾の五木の緑を彩る山々を何度もふり返りながら、今度はきっと晴れやかな気持ちでと繰り返していた。

今、数ケ月を経て、何の脈絡もなく、ついとこの春の旅を思い出す時がある。それは時として新宿のビルの谷の雑踏であったり、あるいは行き交う人さえ稀な夕暮れた木曾の山あいだったりするのだが、その都度、穏やかな懐しさに心が温められる。

## あとがき

○又、新らしい年を迎えました。早い雪に驚かされた冬でしたが、まずは穏かな三ケ日でした。嵩の割には重さのある屋根の雪の雪おろしが、街のあちこちで進められています。太平洋側のぬけるような青空の様子を、サッカーの中継が伝えています。

〃冬来たりなば、春遠からじ〃とは言い古された言葉ですが、冬囲いから、あれこれの冬仕度にはじまる冬との格闘のあとに迎える春の嬉しさは、冬の間も青空に恵まれ続ける人々には、とうてい分らぬ程の深さでしょう。

○句集「願生」がお手元に届いてない方はいらっしゃらないでしょうか。有縁の皆様に、と心がけてはおりましたが、心ならず漏れてしまっているかも知れません。どうぞ申し出て下さいませ。早速お届けしようと思います。

○寒さの砌、皆様風邪をひいたりなさいませんように。（慎子）